

本願寺本三十六人集の裝飾の成立ちに就いて

—特に下繪を中心として—

白 畑 よ し

平安朝の美術には概念として裝飾的、或はその雰圍氣が濃厚であるとされてゐる。しかし平安朝の裝飾的趣味は、たゞ表面の美しさだけを目的としたものでなく、多くの場合それを必要とする内容的な意味を伴ふことが既にあしで繪、或は歌繪等に具體的に一端が示されてゐる。即ち裝飾文様は有機的な細胞として生命を形成してゐるようなものであつて、相互に分離してしまへばその意味は失はれると共に、その美的價値も、血の通はない生采に乏しいものになると想像されるのである。

平安朝の裝飾美が他の時代に比して、殊更に優れてゐるのは、このようなところに根據があると思ふのであるが、こゝに最も代表的な本願寺本三十六人集を擧げて、具體的に示して見ることにしたい。

當三十六人集の冊子の中には知られるように白紙のまゝのものは殆ど稀で、最も簡単な例でも色紙の上に金銀の砂子を撒いたもので、更に砂子の他に大小さまざまな形に截つた金銀箔或は野毛等があ

本願寺本三十六人集の裝飾の成立ちに就いて

る。なほそれに優麗な趣が加へられれば彩色の折枝文様の散らしとなる。また一方に唐紙を地文とするものがあり、種類の上では最も多い。その唐紙には中國渡りのもの、それ等を吾國で踏襲したもの、或は和風に翻案した例等大體五十餘種になるが、當然是等は金銀砂子及び箔散らしのものと共に三十六人集中の基本となつてゐる。しかしこの比較的に簡単な例をのぞいたものは、むしろ文様化された繪畫的なものを下繪としてあるが、また一個の獨立的な繪畫とも見られる例が極く僅か擧げられる。とにかくこの繪畫的な例も單純な趣きから複雑なもの、繰返しのものから個立したもの等、實に變化に富み、裝飾效果の完璧さは、更めて申すまでもない。

それ故、紙數に於て金銀砂子、又は切箔によるもの、併せて唐紙類のものはそれが重要な意味を持つものと推されるので、後記するが、先づこの研究の眼目である大體著色のある獨立的な下繪に就いて記述を進めることにする。

かような下繪のある冊子は大方限られたもので、元眞集、重之集、

能宣集上下、信明集等が主であり、貫之集上、忠岑集、躬恒集等がこれに準ずる例として挙げられる。なほ是等の冊子の中で繪畫的なものの中には分類すれば幾種かの趣致が看取されるのであるが、例へば金銀泥の線描による繰返し文様でないものには、矢張り下繪として或程度意識されてゐるものがある。しかしそれは圖案化された點も認められるので、こゝでは一應第二義的なものとして考へて置きたい。

さて最も繪畫的な意味のあるものとして認められる例は、重之集（蘆に舟）元眞集（竹に雀）信明集（蘆に水波）能宣集上の序文の下繪、梅と片輪車、そして小猫を抱く童を描いたものが挙げられる。

（以上を記述の便宜上甲類と呼ぶとし、次に主として金銀泥による多少圖案化或は文様化された例を乙類とする）

以上甲類の繪畫は、當三十六人集では下繪として、裝飾的な意圖を含んだものではあるが、しかし一面そのことを離れれば平安朝に於ける佛教繪畫以外の風物畫の一端を示すものである。殊更にかような遺品の極少數な當代では最も貴重な意味があることは申すまでもない。そしてこの三十六人集にかような甲類の繪が取入れられたことに就いては唯漠然とではなくて、背景には或る根據が認められるので、その裝飾的な意味には二重に興味を覺えるのである。それ故私の記述は主として是等の繪畫をもととして、内に潜む意味を解いて見たいと思ふのである。

但し本願寺三十六人集の製作期に就いては、既に筆蹟の上から諸

先輩の御研究が多くあり、大體天仁、元永間といふ線が定説であると考へられる。私は特にいまそれを問題にしようといふわけではないので、それ等に關しては必要以上に多くは觸れない積りである。

當集が歌の冊子の故に、平安朝時代のしきたりとして歌意、又は感情を描いた繪、或は歌繪とかあしで繪といふ文獻の上によく見る例があり得ることは當然であつて、私は先にこの歌繪、^(註一)あしで繪に就いて、まことに稚拙な論文を書いたことがあつたが、その際に當三十六人集の元眞集中の一紙に琴に水田・鶴等を銀泥描きにした例をあしで繪と判じたことがあつた。必要上少し説明を加へると、この下繪のあるところに奥州の淺香の沼を詠じた「みちのくのあさかのぬまのみちの邊に京よりくる人たち止まれり」と題した名所の屏風繪の歌と知られる例がある。歌は「おとにきくあさかのぬまのあさほらけたえぬけふりは名のみなりけり」とある。琴と田の組合せは常識には全く意味の關係が見られないのであるが、あしでの場合は、それが判じ繪のようになり、琴はつまり「おとにきく」にかゝるもので、文字の役目を持つてゐるわけである。このあしでと大同小異の趣きのものが歌繪と呼ばれると私は考へるのであるが、歌繪の方は主として人間の心情に係ることが多く、あしでの方は風景とか風物に大體當てられるようである。私はさきに「あしでと歌繪」の研究の折には三十六人集ではこの元眞集以外の下繪にあしでや歌繪のような判じ繪的な例を見出すことが出来なかつたのであるが、今度三十六人集の繪畫を檢討して、もう一つあしで繪と考へられる

例を知るに至つた。

それは菅集の甲類の繪畫の中でも和風の色彩が濃厚で優麗な趣の梅とすゞきや車輪のあるもので、もう一つは裏合せになる紙に迫力とそして寫實性の感じられる小猫を抱く童に傍に大きなすゑがめのある繪である。これはどちらにも能宜集上の序文の下繪で、即ち二紙にわたつて冊子では梅とすゞき車輪 (Pl. Va 参照) の次の開きのはじめに猫を抱く童 (Pl. Vb 参照) のある圖が描かれてゐるのである。早春に咲く梅花の傍には秋のすゞきが生えてゐる。これは元眞集の琴と田の組合せほど極端ではないが、やはり季節としては奇妙な取合せである。また車輪はよく歌繪やあしでの中に用ひられる一つのしきたりなので先づ季節の矛盾と車輪のあることから推察して判じ繪の意味を持つてゐると看取される。更に次頁には序文がつゞき、その下繪として大きな瓶と、その傍には小猫と童が下方に描かれてゐるわけである。二つの繪畫の梅とすゞき、童と猫とは題材の上でもまた描き方の趣きからも對蹠的なものと一見して知られる。しかしここにも歌繪やあしでに常套な瓶が見られるので、矢張り判じ繪の意味がかけられてゐると考へられる。それで元眞集などの例から推してもやはり序文の言葉に何かの意味が言葉となつてひそんでゐるものと見なくてはならない。さうとして一通り序文を讀んでも、すゞきには簡單に當籤まるような意味は見出されない。しかしその容易にさぐり出せない點が平安朝の歌繪やあしでのねらひどころなのであらう。當時の機智にすぐれた人々には恐らくわけなく判じ取れる

本願寺本三十六人集の裝飾の成立ちに就いて

としても、現在私達にはとてもこのひねつた、かくれた意味の言葉にかかることが多いあしでや歌繪は相當に苦心して詮索を試みなくてはならないし、また必らずしもそれが當つてゐるかどうかも心許ない次第なのである。さうとしても一應こゝに私なりに以上の繪をどう判じ讀むかを大膽に試みることにしたい。先づその中の部分的な車輪は「わ」瓶は「へ」ともかけてゐる例があるが、こゝでは大きな瓶はすゑがめ、即ち當時の呼稱「須惠」に通ずるかと推される。

この例は大體單純に一つの文字が言葉の役割をしてゐるにすぎないが、少し複雑なのは梅花は花となり、また薄は月に通ずるといふ風に連想によつて或る言葉になる例である。元眞集の琴を「音にきく」といふようにかけることも同趣である。次の猫を抱く女童らしい子供の圖であるが、この瘦せた鋭い感じの猫はよく見ると、素直に抱かれようとしてゐるのではなくて、童の手をさけて逃げようとしてゐる。子供はそれを無理に捕へようとしてゐる。この童の顔は正に逃げるものに挑む表情が見られるのも興味深い。このむりやりには「なまじひ」の言葉となる。この序文中に「なまじい」といふ語があるので、或はこちつけの感が残るが、しかしこうした冊子の裝飾としての人物繪に敢へて童が無理強いに小猫を抱く例を描く筈はないであらうし、またこの猫を抱く圖に就いては物語の意味がかくされてゐると推される。これは後述することゝし、それと共に傍にまた須惠を描き加へる要もない、それ故歌繪としてはこゝまで繪の中に含む謎を解くことは普通のことと、花と月が或る程度肯定出

三七

來るのに省みてかように解釋をつけたのである。

この序文の文章との對照上全文を轉載して、その中の言葉に當條められる點に傍點を加へて見ることにする。

それ卅一字の詠わづかに家風をあふけといへども、萬葉集のつたへすでに古賢におよびがたし、こゝに男女會標のゆふべ芝蘭をりてちぎりをむすび、遊人餞送のあか月盃酌をさくげて、わかれをくしむ。そのほか月をみ花をもてあそむ候いたることに興にのりしころさしをいふとぎにあらざといふことなし。しかるをあるいはくちに詠じてその草をとどめず、あるいはふでにおほせてこの心しるさず、むなく數年をおくりてよりこのかた、円融太上法皇の在位のすゑに勅ありて家集をめす。今上山山聖代また勅ありてしおなじき集をめす。この時にあたりてかさねて乾葉の草ひろひてなまじひに萎花のことばを、あつめては時勢の艶精はるにうやまひてみだりかはしく僅の風をそしるといふに、

とにかくこの序文の言葉に機智をかけて如何にもさりげなく繪畫として表現したもので、全く平安朝の獨特の洒脱味の溢れたともいふ好例と思はれる。そしてさきの元眞集の「淺香の沼」よりも更にこの梅とすすき車輪には和風の豊かな優美さが示される。これは作繪とされる隆能源氏に見る梅や櫻、秋草等の趣きとよく相通ずるもので一方の白描的な童と小猫の圖その趣致とは對蹠的なものであらう。この兩様を一つの序文の半分の中の下繪として使ひ分けてゐる點に、當時の繪畫のあり方を示唆するものとして大いに注目されるところへられる。

次に右の能宣集とはまた趣致を異にする例として擧げられるの

は元眞集中の金銀砂子撒きに銀泥の蝶鳥文様のある地に竹枝を中央に描き、雀が群れて止まつてゐる小景の繪がある(P. 111 参照)。竹は枝も葉も鮮かに美しい緑青であるのが印象的である。殊に葉先は際立つて尖鋭な、實に神經の行届いた描線で、少しもあまさがなく厳しささへ感じられる。それに比して雀の様子は素朴なさりげない筆致で、何となく冬の冷氣の中に身を少し固くしてゐる様子である。

この地に砂子が紛々と舞ふ粉雪のように撒かれてゐると相俟つてさう思はせるのであらう。それは期せずしてこの紙の歌の一首に「うしとてもかつもきえなてふるゆきほとにわかみはゆきにおとらさりけり」と書かれてゐるのが一層その推察を深くする。

竹に雀の繪は有名な牧溪が描く墨繪のいはゆる「濡雀」の繪があるが、これも冬の冷雨の中にうづくまる雀とされてゐる。元眞集の竹雀と、牧溪のそれとは比較の對照とはならないのであるが、その風物畫としての捉へ方に一脈相通ずる趣きがあるとするのは思い過ぎであらうか。

それはともかくとしても、雪にかけた歌と、その雪にもめげず、外氣の中に姿をさらす雀の繪との相通ぶ意味は、當時行はれてゐた歌意の繪といふものに當るのではないかと想像されるのである。

更にこの三十六人集中で歌意の繪として指適されるものはこの外にも見られるので、この元眞集もそうした傍證のあることによつての推定なのである。その一つは信明集中に蘆に波を描いた繪がそれであらう(挿圖1参照)。

挿圖 1. 本願寺三十六人家集 信明集 蘆に波

この蘆は元眞集の竹と同じく寫實的な趣が見られるが、波の方は相當文様化され、しかも優しい繊細な趣の流水である。しかしこの對比は決して不調和を感じさせず、落付いたしつとりとした味合ひがある。上に書いてある歌の中には「我こひはなにはのあしのうちなれやなみのよるよるそよときうつる」と詠んだ例があるので、適確に歌意の繪であることが推察されるのである。

當時は知られるように難波の蘆はよく歌に詠まれた例が多い。それは一つの名所としてたゞ敍景のみではなく、蘆のそよぎが人の心情の戦きにたぐへて詠まれる。殊に又それが引いては繪に描かれて當代人の愛好を呼んだことが窺はれる。それ故この蘆と波の繪は、最も普遍的な風流の繪様としての一例であつたと思はれる。

なほ、この蘆には穂が出てゐることゝ、傍には河骨が生えてゐるので、恐らく晩夏から初秋にかけて、しらじらと光る水流の波に相應じたすがれ行く蘆ではないかと見受けられたが、これほどに風に揺曳する蘆を一莖つゞ各々に異つた趣になびかせて描いて、自然の姿をきびしく追求してゐることは稀に見る例であらう。しかも風流の繪としての詩情が豊かにひそんでゐることは、一見して感受されるであらう。

風流の繪と申せば、又本願寺三十六人集中の裝飾として最上のもゝとして擧げられてゐる重之集の最終紙がある。これは中央の切繼の紙に描かれた「蘆に舟」(Pl. III 参照)で、平安朝の「ものゝあはれ」の趣の裡にこれほど直感的に人を引き入れる繪畫はないと思

ふ。この蘆も前の信明集とは少し異なるが、やはり風になびくけはひには冴え々とした趣がある。また舟の描寫にも安易に省略した筆線はなく、きりつとした神經の行届いた感じがある。そしてこの切繼になつてゐる周圍の唐紙は全く圖案化された海波に千鳥の描き文様で舟漕ぐ人も見える。この「蘆に舟」の繪とにびつたりと調和を保つて、實に裝飾美の極致を作り出してゐる。かように二つの異つた趣致が相寄つてかもし出す美は既にさきに擧げた能宣集の序文の下繪にも、信明集の「蘆に波」にも示されてゐるところである。こうした美しさの妙味は是等に限らずこの三十六人集の至るところにひそむ秘密ともいふべきものであるが、引いては平安朝美術の性格を如實に見ることの出来る例である。

そしてこの重之集の「蘆に舟」も以上に擧げた三例と殆ど同じく歌意を示すものと認められる。たゞ例へば信明集の「蘆に波」とその和歌ほどには素直には結びつかないが、内奥にひそむなぞの意味を解けば、そこにもまた平安朝らしい趣向がうなづけることと思ふ。即ちこゝに散らし書きにしてある歌は「えたわかぬはるにあへともむもれ木のもえもまさらでとしへぬるかな」であるが、この埋木はものゝ名であるが、その意味は古語では一般に物事が表面に出ないで、世に捨てられ顧みられない身などにたとへて使はれてゐる例が多い。こゝの歌でも當然そのような境遇をかけて詠んでゐる。

それ故蘆に圍まれたまゝに、人の漕いだ様子もない舟はいはゞ捨小舟として埋木に相通ずる意味を示すものと想像される。

銀の海波の中央に鮮かな綠青の蘆を淡黄の舟と、なほその下方には切繼で岩を深い紫紺で現わしている色彩の配合と、その上に磊落に散らし書きの流麗な假名文字、しかも全體にひそむ機智と詩情とによつて殊更にその價値の高さが認められる。

なほこの「蘆に舟」に就いては、情景の趣致に察して、夏か秋のいづれかであるが、私は漫々として大海原を唐紙の海波の文様で示し、また舟を漕ぐ人も點々とあることによつて先づ夏の季に當てたいと考へるのである。

このそれぞれの甲種の繪に大方季節が當てられるといふことに、私の取上げようとする問題があるので、もう一度以上の繪を繰返して見ると、能宣集には梅とすゝきがあるが、一見して芳淳な趣の梅が主景と見受られるので、これは春の季節を考へることが妥當のようである。次に重之集の「蘆に舟」が夏、そして信明集の「蘆に波」が秋となり、最後に元真集の「竹に雀」が冬の景に當るとすれば、本願寺本三十六人集の下繪中の最も主要なものは、かように四季の季節感をそれぞれ織入れてゐると解されるのである。

以上の下繪をそれぞれ上に書く歌に合せて挿入するといふことは、決して無雜作に出来得ることではなくて、この場合には非常に綿密な計劃が要望されることは申すまでもない。既に先學によつて、本願寺三十六人集は書の筆者他の古筆との類例や、その他の見解から或る企劃者の統一的な手腕によると指適されてゐるのであるが、

私は書體の研究を離れて、裝飾の繪畫の上からの推察によつてもかように推定される。すなわち發案し、企劃した恐らく幾人かの人達の用意周到な並々ならぬ苦心のほどが窺はれるのである。

それならばもつとこうした歌意やあしで、或は歌繪の類が描かれてゐるさうなものと一應常識的に思ひ及ぶことであるが、僅か四五圖に止めた點に意味があるのであつて、これこそ何かのしきたりに従つた故に外ならぬと思ふのである。しかし一應この結論は後に譲つて、もう少しこの三十六人集全體の裝飾を檢討して、そちらの方面からも問題の根據を明かにして見ることにしたい。

それに關しては以上に擧げた甲類のいはば本格的な繪畫の下繪の外に假に乙類とされる繪畫に就いて考察して見たいと思ふ。その最も好例は、さきにも一寸記した元眞集の淺香の沼と琴の圖である。大體是等は金銀泥、或は淡墨の線描きのもので、部分的に僅かに色彩を添へる例もあるが、しかし竹とか蘆のような本格的な線描のものには殆どない。いはば淡々と筆にまかせて引かれたもので、その點繪畫としては第二義的なものであり、従つてそれだけに圖案風に近いものも見受られるわけである。

また描いた意圖にもそれぞれに異つたものがあり、前記の甲類のもののように一貫した季節といふようなことも必らずしも共通して居ないし、またその中には大同小異にそれが繰返し下繪とされてゐる。例へば、銀泥の海波等折々見る例である。いま本論に必要なものを取上げて行くと先づ順集の一例である（挿圖2参照）。これは甲

類のものにくらべると、いかにも影が薄いとでもいふ感じで、ふと見落してしまふ態の繪で、はつきりと繪様も辿り難いほどである。

しかしこれには歌文字のない餘白の紙で、次のような繪を描くことを豫定してゐるかにも思はれる。大體庇と柱からなる簡單な吹放しの細殿のような建物があり、そこから兩側に垣のある細い小徑が曲つて通じてゐる。その間には點々と小草が生えてゐる。それに二人の男が道の傍に佇んでゐるが、どうも一人の方は盃を持つて居り、もう一人は瓶子らしいものを手にして相對してゐる様子に見える。

その建物がどういふものか、また人物が果して酒盛をしてゐるのか、判然と解り難い情景である。或はその淡い線描のたどたどしいいはゞ幼稚な趣きが、樂書とも言ひたい感じである。なほ下方にはあしで文様があり、水流、鳥等が常套的に描かれてゐる。

こゝには他の例のように歌は書いてないが、順集の中にはこの繪と相通ずる歌のあつては興味が引かれる（現在は斷簡の部分）。「四月神まつり」と前詞があり、「神のますもりのしたくさ風ふけは、なひきてもみ□まつるころかな」といふ例がある。さうすると小草の點々と生えてゐることが一致して、これは神社の建物の一端であり、また酒もりの人物は祭を祝ふことを示すものではないかとも推察されて、或ひは「祭」ともなり「祝」とも意味づけられるであらう。唯どうしてこの紙の空間を利用して素人らしいたどたどしい筆致でこれを描き入れたのか謎であつて、諒解に苦しむ態のものである。或は後人が附け加へたものか、いま遽かに推察を當籤めよう

以上に挙げた繪畫の甲乙類を含めて私がこれから必要なのはその中の畫題である。即ち個々に拾つて行くと、即ち琴、田（元真集）、舟、蘆（重之集）竹、雀（元真集）、波（信明集）、梅花、薄、童、猫、車輪、須惠（能宣集）そして順集の祭、祝の含むものは社・垣・下草・酒盛の人物、といふ風になるのである。これ等の個々のものが構成してあるものを大別すると、四季の春夏秋冬・人（童と猫とはこれはまた二重に戀の意味を持つてゐることは後述する）祝、といふ風になると考へる。本願寺三十六人集主要な下繪のそれが、かように分類されることとが、先づ重要な意味を含んでゐるのである。

そのことは一方に平安朝中期頃つまり古今和歌集勅撰の前後急速に發達して來た和歌分類意識によつて作成された類題歌集の分類の項目の重點に符合するに思ひ至るのである。類題和歌集として吾國で最も早く、しかも廣大な内容を示す（二十五項、五百十六種に細分）ものに古今和歌六帖六卷がある。これは一般に古今六帖として通用し、又古くは六帖とも稱されたが、國文學史上ではこの古今六帖は中國の白氏六帖に因み、その分類の大體はこれに據つてゐるとされる。更にそれを和歌の題材に則して部分的に變更されたものと認められてゐる。^{（註二）}白氏六帖及び古今六帖に就いては、私は非専門の立場として仔細にわたつての記述は避けて、専門家の研究に委ねたいと思ふのであるが、たゞ便宜上必要の事柄を拔萃することにした。即ち古今六帖の編された時期には諸説があるが、いづれにしても古今和歌集撰の前後程遠くない頃の推定が可能のようである。そして

挿圖 2. 本願寺三十六人家集 源順集

することは避けたいが、しかしいづれにしても、祭とも祝とも思はれるこの繪様はこれから進めようとする本論の内容に關聯があるようにと思はれるのである。

大方その頃から白氏六帖等外來の文學の分類に刺戟されてか、また漸く吾國に於ても和歌の作品も多數となり、そのまゝの羅列では容易には或る歌をさがすことも困難になつてゐるために、必要上整理的な意圖も一面に働いたのであらう。これは唯和歌だけに限らず、吾國の一般文學の上にもその意識は滲透し、源順編と推される和名類聚鈔等はやはり自然現象や、すべての事物の分類表の基本となつたことは知られる通りである。當時白氏六帖を土臺として、和名抄や古今六帖の分類がその間性質に應じて項目に多少の出入はあつたにしても、先づ自然現象なり事物等を集大成し、それをある程度の分類に従つて配列するしきたりとなつた。

本願寺三十六人家集は、矢張り平安朝中期過ぎ流行したこの和歌の項目の分類意識が反映してゐることは、即ちその下繪をはじめ、すべてのその裝飾の中に窺ふことが出来るといふのが、この論文の主な問題になるのである。先づ三十六人家集の書寫は既に本願寺本より約二、三十年に遡つて白河帝の頃に行はれたものと現在御藏切があることによつて書道史の上で推定される。しかしこの先蹤の三十六人集の料紙には本願寺本のような裝飾はなかつたであらう。とにかく極僅少な資料のみでは想像も許されないで、本願寺本との關聯は知られないのであるが、裝飾は別として本文には大差はなかつたと推察される。三十六人集は一種の集大成とはいひながら、作家別であり、古今六帖の多くの作家を綜合した集大成のような分類は當然出來得ないのである。しかし分類が當時の和歌集のしきたり

本願寺本三十六人家集の裝飾の成立ちに就いて

とすれば、何等の態でそれを織入りたいといふ欲望があつたのではなかつたらうか。その結果として既に古今六帖に擧げられてゐる分類の項目を嚴密に踏襲することはむづかしいにしても或る程度の種類を下繪や裝飾として、つまり可能な範圍で形や色彩として織入れて見ようと試みたものと推察される。

殊にこうして裝飾ではないが、三十六人集の外の家集にも分類意識の働いてゐる先例があるので、本願寺本がたゞ新奇を銜つて古今六帖を追従したといふのでもなく、そこに至つた經路には極めて妥當な自然さが認められる。たゞこの先例もいまその多くを佚してゐるので、片鱗を窺ふに過ぎないのであるが、それは古筆の上で殘缺として傳へられる傳貫之筆といはれる名家々集切である。この歌集は類別されてゐるので、一名に類別和歌集とも言はれてゐる。その殘缺によつて窺ふ分類を參考として羅列して見ることにして、併せて本願寺本三十六人家集との關係を辿つて見ることにする。

源公忠集

郭公、秋部、暮秋 月 紅葉 薄 菊

藤原興風集

春部、若菜 三月盡 梅 櫻 款冬 鶯

坂上是則集（名家々集切及び本願寺本是則集によつて推定すると）

春、柳 櫻 桃 松 鶯

夏、時鳥

秋、時雨 露 山河 紅葉 菊 雁

冬、雪 水

祝、苔巖
戀、不被知 被知 會 會後
別、風
雜、松 鶴 龜 猿

藤原兼輔集（この集は一名堤中納言集と呼ばれ、古筆切としては全部現存して居ないが、寛永七年の奥書のある榻本によつて大要を知ることが出来る。尙雑部と哀傷部の零簡は安田家本によつてわかる。）

春部、元日 三月盡 梅 柳 櫻 款冬 藤 歸雁
夏部、郭公
秋部、七夕 霧 紅葉 菊 女郎花 雁 鹿
冬部、時雨 殘菊
戀部、不被知 被知 會 會後
雑部、秋 山 坂 野 瀧 髮 子 老 懷 舊 衣 枕 扇 琴 山
居 蓑 蟲
哀傷部、春 歲暮 河 濱 浪 忘 草 草木 身 夢 纏衣

のような題目が知られる。範圍はせまいが、殆どが古今六帖の分類項目の中に含まれることが見出される。家集の先驅とされる名々集に既にこうした傾向があつたとすれば、當然三十六人家集にも幾許かこのような風潮は現はれても當然な筈である。それは私のいふ下繪や裝飾によるのではなくて、名家々集のように實際に題目録はなくても、家集そのものが、具體的に或る分類意識をもつて編されたものの例である。これは果して三十六人家集の順集に見出すことが出来るのである。和名類聚鈔の編者といはれる源順の家集として、はまことに適切なあり方として注目される。即ち本願寺本三十六

人集によつて具體的に知ることが出来るのである。

順集には有名な「あめつち」の歌による詠歌のあることが、この類別への意欲が働いてゐるのを先づ單的に示す。「あめつち」の歌は知られるように「天地星空山川峯谷雲霧室苔人犬上末硫黃猿生せよ榎の枝を汝居て」といふのであるが、これを歌の上下に据えて源順は四十八首詠じてゐるが、この四十八首は更に、春夏 秋冬 思 戀、と各八首つゞに詠み分けてゐる。そうすると、四季の春夏 秋冬と思戀は歌題として大きな基本的な意味になることが、兼輔集とも大體一致してそれを示してゐる。その他全容を傳へないが、名家々集にもやはり先づ春夏秋冬が最も先に立つ分類であらうと想像させる。それに符合して古今六帖の第一帖が春夏秋冬天、となることが挙げられる。それ故本願寺三十六人集が最も重要な下繪に、春夏秋冬の季節感の繪が組入れられてゐる意味が諒解されるのである。また歌合の多くはその歌題にこの四季が主眼となる。（註四参照） 料紙を美しく飾る裝飾としてならば膨大な紙數の割合としては實に不當にこの下繪が少ない結果となつてゐるのも、この基本的な項目のみを入れたとすれば、合理的によくうなづけるのである。

もう一つ春夏秋冬と共に基本となるものに戀がある。順集には、その他「思」が入るが兼輔集ではなくその性質として「戀」の中に含ませたと考へる。また歌合の場合にも四季と共に同じしきたりが折々見られる。

當集での「戀」に就いては最も有名な源氏物語中の柏木と猫、つ

まり物語中での悲戀として知られる女三宮との關係が唐猫によつて糸口が開かれるのに關聯する。前述の能宣集の猫を抱く童はその戀を暗示させてゐる。少し煩雜ではあるが説明を加へよう。

源氏君の邸での蹴鞠の折唐猫の小さいのがみすに引きかゝつた爲に開いて不圖室内が見え、柏木は女三宮の姿を垣間見て、その美しさに強く心を引かれる。みすはすぐ閉ざされたが柏木はやる瀬なくその猫を抱く、その折の柏木の心境は若菜上に

「理なき心地のなぐさめに、猫を招きよせて、かき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげにうち鳴くも、なつかしく思いよそへらるるぞ、好きくしきや」

更に若菜下には、この猫を尋ねて

「心のうちにあながちにをこがましくかつは覺ゆ」として盗みとるのである。

「夜もあたり近く臥せたまふ、明たてば猫のかしづきをして撫で養ひ給ふ。人氣遠かりし心もいとよく馴れて、ともすれば衣の裾にまつはれ、寄り臥し睦なくを、まめやかに美しと思ふ。いといたく眺めて、端近く寄り臥し給へるに來て、ねうくといとらうたげに鳴けば、かき撫でて、うたても進むかなとほゝ笑まる。」

戀ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなく音なるらむ
これも昔の契りにや、と顔見つゝ宣へば、いよいよらうたげに鳴くを、懷に入れて眺め居給へり。」

この前文に柏木と女三宮の猫のことは可成り長々しい文章があるが、恐らく後世まで柏木と猫とは戀の象徴として、一種の譬喩とし

本願寺本三十六人集の裝飾の成立ちに就いて

て傳つてゐた有名なことであらう。私は會て室町末期頃の土佐派のもので五十四帖殆ど揃つてゐる色紙を見たことがあるが、若菜上には六條殿の蹴鞠の場合が描かれ、同じく下にはこの柏木の猫を抱くところを描いてゐた例であつた。若菜卷上下の多量の文章の中にいろいろ事件が織込まれる中から特にその中二帖共にこの猫に及んでゐることは、注目される。後世でも源氏繪の卷の場面は傳統に従ふものであつた故に、どれほどこの柏木と猫の話が興味を持たれてゐたかの證左となる。私はさきに猫を抱く子をその動作から無理強いに抱かうとする様子と見て能宣集の序文の「なまじひ」に言葉合せたのであるが、これが二重の意味で柏木の戀にかけてあるとするとよく一致することになる。柏木はこの猫を「あながちに」おこがましくも盗みとるので、「あながち」と「なまじひ」は殆ど同意味の語である。それにまた柏木は源氏の君の不在を覗つて女三宮に近づき無理じひに思ひを遂げるので、いづれもその出所は柏木のこと暗々に結びつけてゐることが知られる。即ちこの考案者は、柏木のあながちな戀の意味と、同意語のなまじひの文字の兩方を相通じさせ、そして更に古今六帖の第二帖の人の部の童(うなぬ)の意を含ませて連想をかけたと想像される。一面には本願寺三十六人集製作當時の源氏物語への心酔の世潮の一端が面目躍如として裏付けられてゐることが感じられる。

以上の主要な繪畫は大體右のように解されるのであるが、なほその外の主要な部分に就いて簡略な説明を加へることにしたい(細目

に關しては後の附表に譲る。古今六帖の第二帖は、山、田、野、都、田舎、宅、人、佛事であるが、その中の山、田、野等はよく見ることが出来るし、又第三帖の水に至つては海波に水流が殊に種々變化を持たせて現はしてゐることも更めて指適するまでもないであらう。第四帖には戀、祝、別基本的な項目であるが、戀、祝の例は既述の通りである。殊に「祝」は春夏秋冬、戀ほど本格的な下繪ではないが、とにかくさきの説明のように順集に見出されることは、やはり分類の意圖によると思はれる。或はこの基本的な題目の祝がなかつた爲に後にその不備を補つて描き入れたのではないかとも推される。第五帖には雜戀、服飾、錦綾等があるが、元眞集の琴などはその服飾の中に琴の項目があるのと一致する。第六帖は草、蟲、木、鳥であるが、これに就いても多種多様の趣きの例が三十六人集中の各處に見出すことが出来る。

しかし當三十六人集中最も多く各集の至るところに示されてゐると思ふのは第一帖の「天」の部類に屬する例であらう（別掲附表參照）。雲、雨、雪、霞、霧、煙等の現象は、つまり大小の金銀箔、野毛や折枝文様、鳥蝶など動きによつて細かく見ると種々に區別されてゐることが知られる。その中の一例を紹介すると、「秋の風」に相當するもので、やはり乙類の繪畫に入る例で元眞集中に傘をさして馬に乗り、荷らしいものを持つ従者を従つた人が野路を行く様子である。遠くの空には雲の間に夕やけの色がたゞよふ、野には秋草が風に亂れる。秋の時雨の中を行く旅人であらうか。そこに書い

てある歌の一節には「をみなへし秋のかせはあたりしもせし」また「花すゝきかせにみたるゝゆふくれに あしかりけるとおもひしらるゝ」等があり、その點でも「秋の風」が主となり、更に「旅人」「時雨」「秋の野」などにも意味を重ねて通はせてゐるかと思はれる。

かような元眞集の場合は比較的具體的にはつきりと示されてゐる例であるが、その他この「天」の部に屬する天と地の氣象の様相は或は粗密、光と影、靜動、色彩の濃淡等、限りなく變化の妙を餘すところなく發輝してゐる。それはことばの旋律として書かれてゐる三十一文字の詠嘆のように詩情をかもし出してゐると思はれる。そして當然この天地の折々の姿はしとやかな風情ある京畿の氣象のかもし出す夢幻的な四季の趣きであらう。色彩と文様と繪畫と更にその上に流麗な和歌の草假名と渾然と融合した一大交響樂にもたへられる感がある。

たゞ天地の現象は最もこの三十六人集の主要な裝飾となつてゐるが、人の生活に關するものとしては性質上至つて少ない。それにしてもいかにも平安朝らしい機智と美意識に溢れたものとしては、第六帖の服飾に含まれる衣に就いてゝある。當三十六人集の重繼には、恰度女子の盛裝の五衣の重ね目と同じようにそれぞれ異なる五色を恰度袖口のように表はしてゐるのは、その數の上からも五枚に符合するので恐らくその美しさを、そのままに重繼にして衣に通じさせたのと推察される。これは今までにない全く當時の裝飾趣味の極致で、むしろ工藝的な趣味に傾いたものと考へる向もあつたが、こ

うしてすべての裝飾が單なる技巧の爲の結果ではなく、直接には分類項目が生んだ必然の成果であると解されるものである。

最後に、當三十六人集の裝飾でのまた一つの主流となつてゐるのは唐紙である。中國から渡來ものと和製のもの併せて約四十數種が各冊に大體繰返し用ひられてゐる例が多い。これは既に行成筆と傳へられる和漢朗詠集（御物本、陽明文庫本）等に先蹤があり、この三十六人集獨特の裝飾ではないが、その文様の變化に富むことに於ては唯一のものとされる。唐紙の文様中には直接分類項目に入り難いものもあるが、しかし當然それに含まれるものが多くあつて、矢張りそこにも分類項目への關聯の意圖が掛けられてゐると推察されるものがその例はいま省くが認められる。唐紙に就いては、この三十六人集によつて當時は和製唐紙の最盛期と見られてゐるが、かように變化に富む各種の文様の出現も一方にはその分類意識に關聯するものとして考へることが出来るであらう。

本願寺三十六人集の世に冠絶した豊富な意匠によるその裝飾は決して偶然に出でたものではなく、前記のように計劃的な前提があつたことが推察されたのである。従つて當然この三十六人集の書寫作成の規程に關しては主催者があつて、各筆者に手渡されたものであることは深く考へるまでもない。しかも下繪とそれに相當する和歌の一致してゐる上から見て、實に周到的な神經がいたるところに行渡つてゐることが看取されるが、更にかような森羅萬象を自然的に美しい効果を生み出したことも決して偶然の趣味によるのみのものではな

本願寺本三十六人集の裝飾の成立ちに就いて

いと考へられる。即ち森羅萬象を三十一文字の和歌の形式の中に入れて詩情の表現の練磨が潜在してゐるからこそと思われる。例へば歌意の繪のように、それをうてつけに生のまゝに表現せず、暗示的に、または連想的にその歌の言葉の裏にこゝろをひそませた裝飾を考案することが出来たと私は思ふのである。

極端にいへばこの本願寺三十六人集の外に平安朝の歌料紙として桂宮萬葉集、その他金銀泥による蝶、鳥、折枝文様等のあるもの、或ひは唐紙に書寫された例は若干あるにしても、それこそ裝飾の爲の裝飾より他意あるものではないと考へられる。

それ故平安朝の裝飾の極致は矢張りかような和歌を母胎としての有機的な結びつきが生育したものと見ることによつて、更にはつきりと首肯されるものであらう。

以上のことにすべて關聯してまた注目しなければならないのは、この歌文字である。書道史上で本願寺三十六人集を平安朝の草假名の最も流麗の圓熟の極に達したものと見るのは、結果として當然であるが、これにしても唯年代の練磨の堆積が生み出したものではなく、料紙の裝飾の風、雨、雪等天地の空間のそれ／＼の微妙な動きに應じて、いかに調和を得ようかと心をこらした筆のすさびが、他に類例のない流麗美をもたらした故であらう。

好例として貫之集下を同筆と鑑せられてゐる金澤本萬葉集や、また遍昭集と相通する傳公任筆拾遺集等、その他に於ても凡そ同筆とはいはれる他の古筆類に比して見れば、律動する裝飾の中に遊泳す

る生きもののような流動を感じるのである。こゝでは和歌、文字、装飾とが三位一體となつて輝き出でた至藝とされるところである。

本願寺三十六人集の草假名の流麗さ、即ちその前後の草假名に比して一際群を抜いて、その装飾文様と一如となつて歸化し、一個の文字を離れて旋律となつた素因が諒解されるのである。

さて最後に本願寺三十六人集が中國の唐紙の使用は別として、曾つて最も和風の濃厚なものと推されたものであるが、その装飾文様の素因が白氏六帖の追従による古今和歌六帖の分類に準據するものであるとすれば、そこにも間接ながら中國文化の流れが汲まれてゐることになるのである。しかしこの中國文化への憧憬は既に和様化が立派に打立てられてゐたと思はれる平安朝盛期にも、種々の點に現はれてゐるのであつて、當三十六人集に中國渡りの唐紙を見ることは、矢張りその風潮の一端の現れにすぎないと思はれる。

全體の紙數から言へば、この唐紙は割合として少ないのであつて主となるものは當然天地の現象によるもので、それこそ京畿の自然に培はれたものに外ならないとすれば、その點では民族的な優しさの本領を發輝したと認めるところである。

しかし、なほ前に擧げた下繪の、例へば竹と雀、蘆と舟、蘆と水流に見る、竹や蘆の鋭くさえた線描や、また能宣集の小猫を抱こうとする女童の直截な寫實性には、むしろ宋畫の趣致に相通ふものがあるとする向もある。これは一方に能宣集の梅とすゝき車輪の繪の

いはゞ優しく靜かな感じに比して對蹠的な味合ひのものである。この梅や薄圖は大體隆能源氏の中の櫻やすゝきの趣きによく類似を見出されるもので、恐らく女繪(註四)といはれる描法ではなかつたかと私は考へられる。さうとすればこの宋畫的な強さのある風物繪こそ男繪と見られるわけである。さうすれば能宣集の序文の場合は男・女繪の兩方を取分けて描くことをまた意圖されてゐるのかも知れない。當時歌情を或は歌題を歌合の際に料紙に描くことはよく行はれたのであつて、その一端はこの三十六人集の製作期より大凡十年期つて寛治八年八月十九日に催された賀陽院歌合に種々の色紙の下繪に左方女繪、右方男繪によつて歌情を描き「美麗過差無極」と記した例によつて、適切に窺はれるのである。こうした先例があつて更に本願寺本三十六人集には大規模な企畫として當然この流行が取入れられるのは自然であらう。

平安朝に於て和歌の盛行によつてもたらされた料紙の装飾のあらゆる粹を蒐め、その上に類題を具體的に、つまり何等かの形象にしてその装飾化に此の上もない美意識を完遂したこの三十六人集は文献に見る歌料紙によつて推察する當時の風潮と一致してゐる。それ故諸先輩によつて考察された製作期が天永頃から元永頃までといふことはまことに妥當のことゝその装飾の成立ちの種々の事象からも肯けると私は考へる。

平安朝の繪畫の様相は知られる通り、佛教關係のものを省くと、たゞ片鱗を垣間見るのにすぎない。私がかねてから佛教關係以外の

大鷹 小鷹 雉(躬恒集) 鳩

鶉 大鷹狩 小鷹狩 野邊

御幸 都 都鳥 百敷

都 田舎 郡 里 古郷

宿 やどり かきほ

國 郡 里 古郷

家(貫之集上) 隣 井 井(貫之集上)

庭 庭鳥 かど と

すだれ 床 むしろ

人 翁 おんな(能宣集上) 親 うなる(能宣集上)

わかいこ 車(能宣集上) 牛 馬

佛事 鐘 法師 あま

寺 第三帖 水

水 水鳥(水鳥) 駕 鴨

鶉(赤人集) 鵜 △龜 いを

鯉 鮒 鱸 鯛

鮎 水魚 河 かはづ

橋(忠見集) 樋 氷せき 柵

夜川 網代 やな 江

池 沼 うき 瀧

にはたつみ うたかた 澤 淵

瀬 海 海人 栲繩

鹽 鹽がま 舟 釣

錨 網 莫告藻 藻(貫之集上)

みるめ われから 浦 貝

渚 島 濱 千鳥

濱木綿 崎 磯 浪

落標 渦 港 泊

第四帖 戀 戀 片戀 夢 面影

戀 戀 片戀 夢 面影

轉寢 涙川 恨 うらみず

ないがしろ 雜の思

祝 祝 若菜 杖 挿頭

祝 祝 若菜 杖 挿頭

別 別 ぬさ 手向 旅(元真集)

かなしび 長歌 小長歌 古き長歌

旋頭歌 第五帖 雜思

知らぬ人 云ひ始む 年へて云ふ 始て逢へる

あした しめ あひ思ふ あひ思はぬ

異人を思ふ 分きて思ふ 云はで思ふ 人知れぬ

人に知らるゝ夜獨をり 獨寢 二人をり

ふせり 曉におく 一夜隔てたる 二夜隔てたる

物隔てたる 日頃隔てたる 年隔てたる 遠道隔てたる

打きてあへるよひの間 物語 近くて逢はず

人をまつ 人を待たず 人を呼ぶ 道の便

文たがへ 人傳 忘る 忘れず

心變る 驚かす 思ひ出づ 昔を戀ふ

昔逢へる人 あづらふ 契る 人を訪ね

めづらし 頼むる 誓ふ 口がたむ

人妻 家とを思ふ 思ひやす 思ひ煩ふ

來れと逢ず 人を留む 留まらず 名を惜む

惜まず なき名 吾妹子 吾背子

隠れ妻 今はかひなし こむ夜 形見

になき思 服飭 玉くしげ 玉かづら 髮 元結

玉くしげ 玉かづら 髮 元結

櫛 玉 玉の緒 玉襷

鏡 枕 手枕 機

衣 鹽焼衣 夏衣 秋衣

衣うつ かり衣 摺衣 麻衣

袈 濡衣 雜の衣 ふすま

裳 紐 帶(元真集) ひとり

言の葉 文 琴(元真集) 笛

弓 矢 太刀(元真集) 刀

鞘 矢 太刀(元真集) 刀

簀(忠見集) 色 苞 笠(元真集)

色 紅 紫 ぐちなし

○縁

錦綾

綿 綾 糸 錦

布

第六帖

草

○春の草 ○夏の草 ○秋の草 ○冬の草

○下草 ○雑の草 山ぶき

○撫子 ○秋萩 ○女郎花 ○すゝき

○篠すゝき ○荻 ○らに ○菊

草のかう○きちかう○りうたん○しをに

くたに さうび 刈萱 萱

はちす ○杜若 菰 花かつみ

○蘆 菱 蓴 根蓴

あさど ○浮草 つき草 忘草

忍草 ことなし草 芹 なぎ

蓼 葎 玉蔓 葛

さね蔓 青つぐら ○朝顔

つばな かにび 紫陽花

董 おほぎ ○蕨 ゑぐ

○百合 ある まさぎ蔓 ひかげ

山たち花 すげ ○笹 ○葵

○かたばみ みくり ○蓬 ○苔

いちじ ○しば

蟲 蟬 ○夏蟲 ○蟋蟀

松蟲 鈴蟲 蝸 螢

機をりめ ○蜘蛛 ○蝶

木 木

○木 しをり ○花

○紅葉 柞 眞弓

○松 かへ ○竹

○梅 ○紅梅 ○柳

庭櫻 ○花櫻 ○山櫻

浅茅 さこく

○藤 ○橘

ざくろ 梨 山梨 ○桃 (順集)

李 唐桃 くるみ 杉

むろ まき 桂 がふか

樗 榲 櫟 椿

柏 ぼく柏 ながめ柏 躑躅

岩つゝじ 楸 桑 はたつもり

しきみ あせみ 山ちさ ゆづるは

かたがし つまゝ さねき

鳥 鳥 放鳥 鷄鳥 かひ

○鶴 ○鴈 鷺 鷺 時鳥

○千鳥 呼子鳥 鴨 鳥

○鷺 はこ鳥 かほ鳥 鶺鴒

たかな 水鷄 ○燕

櫻 ○櫻 緋櫻

(完)

註一 「美術研究」第百二十五號所載「歌繪と蘆手」

註二 「國語と國文學」第三百七十五號「白氏六帖を媒介としての古今六帖私考」

平井卓郎、「同誌」第三百四十九號「古今六帖の編者と成立年代に就いて」後藤利雄

註三 中右記所載、「今夜大蔵於賀陽院歌合歌(中略)」

和歌卷物 卷文各五卷、春夏秋冬祝各一卷、瑠璃軸、色々之色紙下繪、左方女繪、

右方男繪、皆書歌情、美麗過差無極、題、櫻、郭公、月、雪、祝冬一首

なほこの歌合の爲の五卷の巻物の、この三十六人集と同様に春夏秋冬祝

で四季が主眼としたことは注目される。

註四 女繪及び男繪に關しては拙稿「美術研究」第百三十二號所載「女繪考」を参照

本願寺本三十六人集の裝飾の成立ちに就いて

當論文の記述に就いては國文學、書道史の諸先輩の御研究を参考にした
ことが多大であつたことを特に感謝したい。なほこの成果は文部省科學研
究費、「藤原時代の文化の研究」によることを附記する。